

靖国への取り組みは ただ生きることを擁護する

山口 素明

生きることを無条件で擁護する。自らの生を生きようとする人びとの中で、自らもそのように生きるために、これは満たされなければならぬ倫理である。

ところがこの社会はこの倫理をかなぐり捨ててしまった。イラク戦争で殺害された数十万の人びとは、「大量破壊兵器の脅威」と秤にかけられ捨てられたのだし、戦時下の情報統制から単身国境を越え、自らの足と眼と耳とを信頼した青年は、「甘えた平和ボケのフリーター」と差別され、「日米同盟の維持」に比べ価値なしと見殺しにされたのである。生きるも死ぬも場合による。生の擁護はもはや条件つきになった。

どうやらこの社会が擁護すべき生は、公務や大義に殉じることを喜び受け入れる生であるらしい。米軍のイラク人殺害と虐待を手助けする仕事の最中に自らも殺害された官吏は、天皇の臣下に序せられ遺族は巨額の経済的支援を受けた。戦場死したジャーナリストと傭兵は、己の職業に殉じた者としてマスコミで繰り返し賛美された。その一方で、戦争と占領の暴虐を退けるために「人質」を取り交渉を求めた人びと、彼らに「人質」とされた人

びと、その双方が生きるための交渉を政府に求めた人びとは、ことごとく冷笑され、悪罵を投げつけられた。死ぬことを覚悟した生が褒め上げられ優遇され始め

ているのだ。毎年、8月15日に呼びかけられる靖国神社への抗議行動は、このような生の拘束への危機感と怒りを携えて取り組まれている。私たちの抗議は、靖国が保持し続ける侵略戦争を聖戦といいなす歴史認識や、その国家による庇護に向けられるだけではない。靖国こそは、公務や大義のために死ぬ生を「散華」と聖別し、ただ生きることを貶める者たちの拠点なのである。

93年から13回目となる今年、行動は、「靖国・フリーター・戦場死」を問う集会・行動の一環として取り組まれた。現地調査と抗議、そして「靖国解体」を掲げたバルーンを組み合わせた行動に、二〇代、三〇代を中心とする七〇名以上が参加した。ところがその行動が初の弾圧を被った。

15日正午、



九段下交差点付近の歩道上で、ボール紙で作ったプラカードを持ち、靖国への抗議の声を上げようとした私たちに数十名の機動隊員が殺到し、参加者から四名を「公務執行妨害」の現行犯と称して拉致したのである。

ある者は機動隊員に首を絞められたまま投げ飛ばされ、アスファルトに強く叩きつけられた。ある者は機動隊員に突き転がされ数回蹴りつけられた。また、盾やコテで顔面を殴打されまぶたを切られて出血させられた者もいる。四名は盾を持ち鉄兜をかぶり安全靴を履いた屈強な機動隊員に暴行を加えられ、その上で拉致された。その後、当然にも不起訴で釈放されるまで、彼らは一二日間にわたり監禁されたのである。

小泉政権が登場してから今日まで、靖国神社の問題は、軽薄な中年男の火遊びとして軽視されるか、よくて彼の配慮のなさを憂うことに矮小化されたままだ。この事態を私たちは軽視できない。戦争を遂行する政府の態勢が整えられ、それに抗する人びとの営みが弾圧と監視と排除に晒されているからである。私たちの今後の取り組みへの注目と救援会への支援をお願いします。

「8月15日事件救援会」のウェブサイトは
<http://antifa815.podzone.org/>

Eメール: no2yasukuni@sampal.co.jp

カンパ振込先: みずほ銀行中野北口支店

普 1025488 (名義) ヤマグチモトアキ

(やまぐち・もとあき、靖国解体企画)